

日本ボストン会会報

発行者 日本ボストン会事務局

「日本・ニューイングランド交流の記録」発刊

代表幹事 高木政晃

「日米交流のあけぼの」をテーマとした昨年11月の総会で、もう一つの話題の中心となったのは、待望の「日本・ニューイングランド交流の記録」が発刊されたことでした。

ボストンを軸とするニューイングランドと日本との関係が始まったのは200年前に遡りますが、特に明治維新以降の日本近代化の成功は、ニューイングランドからやって来た知識人、そして青雲の志を抱いて同地に留学した若き日本人たちに多くの部分を負っています。

学問や技術が同地からわが国に流入する一方、日本の伝統美を発見し、それを強力に擁護してきたのもボストン周辺の人たちでした。

これはニューイングランドで生活する機会を得た日本ボストン会の各メンバーが、肌で感じてきたことでしょう。そのメンバーの中から、こうした恩義ある先人の足跡を仕事の合間に調査研究する人たちが出てくるのは当然の成り行きでした。

一昨年10月の会報で、世話人の藤崎博也先生が「日本とニューイングランドの交流の歴史」を出版しようと提案され、続く総会で藤崎博也先生と藤盛紀明氏が中心となって原稿を募ったのは、こうした研究成果と知識を整理して、会員やそれに興味を持つ人に、ニューイングランドとの交流がもたらしたものを再認識していただく機会を、一つにまとめた形で提供しようという意図によるものでした。

結局9名の会員が原稿の執筆に応募したことにより、早速、藤崎博也、藤盛紀明、篠崎史郎、関直彦の4氏をメンバーとする編集委員会が結成されました。一人で2つの記事を書いた人もいたので、11編の原稿が集まり、それにボストン・ジャパン・ソサエティのVernon R. Alden会長から以前に寄せられていた日本とニューイングランドの歴史についてのブリーフを冒頭に加え、本文160ページの立派な本ができあがったのは皆さんご存じのとおりです。

当初はもっと簡単な出版物をと考えていたようですが、藤崎博也先生の研究室の助手たちが手弁当で編集を手伝ってくださったこと、藤盛紀明氏の知人に表紙の絵を描いていただいたこと、そして印刷がかなり安くできることになったために、世に出して恥ずかしくない体裁の書籍とすることができました。

そして、もっと重要なことはその内容のレベルの高さで、各執筆者の力の入れ方が窺われます。読んで意外な知的発見をされた人も多いことでしょう。

日本とニューイングランドとの交流が黒船来航の半世紀以上前にあったことは、これまでの常識を覆すものでした。いかに多くの明治・大正のリーダーたちがボストンで知識を身につけ、一方、ニューイングランドから招聘された学者や文化人がいかに日本に恩恵をもたらしたのか、かつての米国の頭脳はボストンに集中しており、実際、かなり最近までアメリカ各地の大学での教授の(次ページに続く)

日本ボストン会イベント

観桜会 4月2日(日)午後6時

千鳥が淵 2ページ参照

ハイキング 4月22日(土)午後1時

多摩森林科学園 2ページ参照

歴史・ハイキングの会 10-11月予定

ゴルフの会 6月8日(木) 6ページ参照

" 10月26日(木) (予定)

総会・懇親会 平成12年11月10日(金)夕

会報発行 平成12年9月末予定(原稿締切8月末)

" 平成13年3月中旬予定(原稿締切2月中旬)

「日本・ニューイングランド 交流の記録」

(つづき)

地位は、ボストンから来た学者たちに殆ど占められていたとのことでした。

戦後もハーバード大学やMITで学び、或いは教鞭をとったり、研究活動に偉大な成果をあげてきた日本人たちが数多くいます。スポーツの分野では、日本ボストン会の仲間である山田敬蔵氏の偉業が、日本・ボストン交流の歴史の流れの中で輝く存在となっています。また「香道とボストン」もボストンならではと感ぜられる興味深い話でした。

この紙面を借りて、執筆された方々、刊行にご尽力いただいた編集委員、そしてご支援いただいた会員の方々に改めて衷心より感謝を表します。

印刷部数は200冊で、会員に頒布したほかは、ボストン日本総領事館、ボストン日本人会、外務省、京都ボストン交流の会などの関係諸団体にも寄贈した結果、現在残っているのは、僅か15部程とのこと。入手ご希望の方は下記宛にご連絡下さい。

頒布価格 1冊 ¥2390 (含内地送料)

申込み先: 関 直彦

(内容紹介は4~5ページ参照)

ハイキングのお知らせ

(4月22日土曜日)

八王子市の「多摩森林科学園」内の丘陵地のサクラ保存林を中心に散策します。

同園は57haと敷地広大で、1000種類以上の樹木があり、特に約250品種を集めるサクラ保存林が見事です。

緑のサクラや匂いのあるサクラなどの珍種もあり、丁度見頃と思われれます。丘陵地ですが、道は整備されています。

散策の後の食事は高尾山々麓の「うかい鳥山」で薩摩地鶏や川魚の炭焼きを楽しみます

食事予約の都合もあります。参加される方は4月10日までに土居、又は篠崎迄お申し込み願います。

集合時間: 2000年4月22日(土) 午後1時

集合場所: JR中央線高尾駅北口改札口

申込先: 土居陽夫自宅 ☎:

" " FAX:

篠崎史朗自宅 ☎/FAX:

2000年大観桜会のご案内

(4月2日日曜日夕方)

春爛漫の一夜を、仲間と一緒に楽しく過ごしませんか。日本ボストン会の会合は「花よりだんご」の趣が多いのですが、このお花見の会は先ず千鳥が淵の咲き乱れた夜桜を楽しむことから始まります。

千鳥が淵は筵を強いての宴会には適しませんが、ビールか、ワンカップを片手にそぞろ歩くには最高です。数年前にレディーがワンカップを片手にして歩くのは如何なものかと言う意見が出て、ワンカップの支給を止めようとしたら、プーイングが起きました。(やはり花よりだんごでしょうかね。)

昨年は29人が参加しました。それまでの小さなイタリアンレストランではなく、宴会の場所を昨年九段下のグランドパレスホテルの「バイキング」に移しました。「ローストビーフ」で有名なグリルです。本当においしいローストビーフでした。

参加者のスピーチも盛り上がり、何時の間にか時間を忘れるほどで、閉会してからもホテルのロビーで何時までも、何時までも語り合いました。

日本ボストン会幹事の篠崎さんはセミプロの写真家です。昨年のお花見の作品を写真展に出展されました。素晴らしい出来ばえでした。篠崎さんの撮られる写真もこのお花見の楽しみの一つです。

今年の参加費はお酒を飲む人7000円、飲まない人5500円の予定です。昨年の収入191,000円、支出は174,330円。繰越金16,670円は今回のお花見の会の費用に繰越させて戴いております。「千鳥が淵」でお待ちします。次の要領に従ってご参加願います。お申込みは3月27日までにお願いいたします。

集合時間: 2000年4月2日(日)午後6時(幹事は6時半迄ホテル前で待っています。)

集合場所: フェアモントホテル前
千代田区九段南2-1-17(千鳥が淵)
(地下鉄九段下駅下車2番出口)

宴会場所: ホテルグランドパレスバイキング(B1)

☎ 03-3264-1111

千代田区飯田橋1-1-1

参加申込先: 藤盛紀明、富美子

自宅電話:

自宅FAX:

会社電話:

歴史を飲もう会とハイキング(平成11年10月23日土曜日)

横浜史跡めぐり

篠崎史朗

今回は開港140周年に当たる横浜の町を、ハイキングを兼ね、散策がてら歴史を尋ねて見た。

当日は穏やかな快晴に恵まれ、午後1時、参加者一同はJR桜木町駅に集合し、帆船日本丸を左に見て、まずは最新のプレイ・スポットみなとみらい21新港地区のよこはまコスモワールドに足を向け、大観覧車に乗って高所から市全体を展望することとした。

ゆっくりと廻る観覧車の窓からは山手や野毛山など市の台地はもとより、天候次第では富士の高嶺や房総方面まで遠望出来そうである。同じ場所にあるジェットコースターは、最後は地上にあるプール目掛けて急降下し、水煙の中に姿を消す趣向が若者の人気を呼んでいる。

市街全体の地形を展望したところで、開港の年、安政6年(1859)と18年後の明治10年(1877)刊行の古地図2枚を出して重ねて見ると、初期の横浜の発展ぶりがよく分かって興味深い。

明治10年頃には、現在の桜木町・高島町一帯は既に埋め立てられ、鉄道が敷設されている。又、市街化が大いに進み、内陸部や野毛山に向けて一般市民の居住区が広がり、一方外国人居留地も元町から山手町の台地へと多くの住居や役館が展開している。開港18年にして市は急速に変貌したのである。

明治5年(1872)、鉄道は横浜-新橋間に完成したが、現在のJR桜木町駅が横浜駅であった。古地図には時刻表が載っており、それによると新橋迄の所要時間は1時間5分で、料金は一等が1円、三等で30銭となっている。巡査の月給が10円前後の時代だから、一般庶民にとっては可成りの高額である。

みなとみらいを出て東へ向かい、現在化粧直し中の赤レンガ倉庫を塀越しに見ながら税関脇を通過して海岸通りに出ると、横浜開港資料館が見えて来る。

この付近は横浜の中でも最も早くに開けた市のダウンタウンの中心部に相当する地域である。そもそも開港資料館のあたりは安政元年(1854)ペリー提督が上陸し、日米和親条約を調印した場所とされ、現在中庭に大きく枝を広げる玉楠の木(タブノキ)はその時、ここにあった木の末裔とされている。全館の所蔵する横浜に関する資料はさすが豊富だ。関心のある人には是非一度歩を運ぶことをお勧めしたい。

この資料館のすぐ近くに現在修理中の横浜開港記念会館がある。そこは本町通りの一角だが、この町通りは安政6年の地図にも登場する横浜で最も古い町通りである。開港の頃、ここに福井藩の屋敷があって、文久2年(1862)、岡倉天心が誕生している。

開港資料館から道一つ隔てた所に、今回は時間の都合で立ち寄れなかったが、シルク博物館がある。

それがなければ日本の近代化はずっと遅れていたであろうと言われる程シルクは日本にとって重要な歴史的産物である。貴重な外貨獲得源として、開国と同時に主要輸出品目となり、以降昭和初期に至るまで、日本の全輸出の30パーセント以上を占め続けたが、その恩恵を受け、輸出港には一大取引所が出現し活況を呈することとなった。横浜はこの間、常に取扱量第一位の座にあり股賑を極めたのである。横浜発展のエネルギーはシルクが生み出したものと言ってよいであろう。

シルク博物館から山下公園を抜け、人形の家近くから急な階段を登って港が見える丘公園に到着。暫し休憩。今回の行程も終わりに近い。

横浜だけでなく神戸でも長崎でもそうだが、港の見える丘には一種特有の雰囲気がある。鉄道の駅が旅情の存在であるとすれば、港が見える丘は異国情緒であろう。出船・入り船の光景が、遠い故国への郷愁を誘い、未知の世界に対する憧憬をかきたてるからであろうか。

外人墓地の横を下り中華街へと向かう途中で、ふと念頭に浮かんだのが、岡倉天心と同時期にハーバード大学の学生としてボストンに滞在した有島武郎のことである。

大正天皇が皇太子の頃、ご学友となった経歴を持つ有島は、父親が横浜税関長であった時、現在の野毛山公園近くで幼少時を過ごしている。一方の天心は、下町とも言える本町育ちで、血筋は別にしても、有島のように上流社会出とは決して言いがたい。

しかしボストン時代となれば、天心が上流社交界の名士であったのに較べ、有島はアナーキスト的反戦思想に傾き、アメリカ社会党など無産政党に接近して行った。狭い日本人社会だった筈だが、この二人決して相目(ま)見えることはなかったようである。二人のそんな巡り合わせの妙を感じ乍ら歩くうち中華街に着く。そこでの夕食はいつもの通り楽しく、ワイワイガヤガヤ。解散。

「日本・ニューイングランド交流の記録」(内容紹介)

1. はしがき 編集委員代表 藤崎博也
(東京理科大学教授)

日本ボストン会は1992年秋に発足した。ボストンと日本を愛する方々が、誰でも参加出来るグループ活動を通じ、知識を深め、親睦を図っている。

この活動を通じて、日本とニューイングランドの交流の歴史に関する話題を、自由にご投稿戴き、手作りの本に纏める事をお諮りしたところ、会員のご賛同を得た結果、11編の原稿が届けられた。これに、Mr. Aldenの英文論文の1編と年表を加え出版した。

仕事の合間の手作りで、統一はとれていないが、ご一読願ひ、ご感想をお寄せ戴ければ幸いである。

2. A Brief History: JAPAN AND NEW ENGLAND

Vernon R. Alden, Japan Society of Boston

筆者はジャパン・ソサエティの会長である。日露戦争の勃発した1904年に設立され、米国最古の日米の交流を進めた団体である。目下100周年記念行事を準備中。

1993年、同協会の90周年記念行事準備で来日したAlden会長と面談。帰国後、発足直後の当会に日本とニューイングランドの交流の小論文を頂戴した。

黒船艦隊のペリー提督来航(1853年)に先立つ1841年、ジョン万次郎がフェアヘーブン(マ州)において教育を受けて以来、1959年に始まるボストン/京都の姉妹都市関係、1990年に始まるマサチューセッツ/北海道の提携関係迄が簡潔に紹介されている。

3. 日本とニューイングランドの歴史を彩る人物像

藤盛紀明(清水建設(株)執行役員・技術研究所長)

本稿はMr. Aldenの寄稿に対する若干の補完である。日本と米国の歴史は、日本とニューイングランドの歴史と言って良いと言う思いを抱いた寄稿であった。ジョン万次郎を始めとする多くの人物についての著作が日本でも出版されているが、京都や奈良を空襲から救ったLangdon Warner氏等についてはもっと研究されて良いとの思いを抱いている。

4. 北海道とマサチューセッツ州との交流の歴史

山下 健一(JICA シニアアドバイザー ラオス)

北海道とマサチューセッツ州の関係は、明治4年に黒田清隆(当時開拓使次官)がアメリカに渡り、教育、地質調査、鉱山開発、牧畜等の専門家派遣をアメリカ政府関係者に要請し、約50人の専門家を

招聘した時に始まる。その中にマサチューセッツ関係者が多く、特にウィリアム・クラーク博士(休暇中のマサチューセッツ州立農科大学長)が来日し、札幌農学校創設へ貢献した関係が現在に続いている。

昭和51年(1976)、北海道大学はマサチューセッツ州立大学アマハースト校と姉妹提携を行った。昭和60年(1985)、マサチューセッツ州知事マイケル・デュカキス夫人一行が来道し、北海道との姉妹提携の提案がなされ、平成2年(1990)2月、札幌において両地域代表出席のもと姉妹提携の調印が行われた。

5. 江戸明治期庶民文化の庇護者、

ピーボディ・エセックス博物館

関 直彦(有限会社リングリスト代表取締役)

歴史の街セーラムに瀟洒なたたずまいを見せるアメリカ最古の博物館、ピーボディ・エセックス博物館の歴史を、日本との意外な関わりを中心に紹介。大森貝塚で知られるモース博士は同館で永らく館長を務め、同博士が収集した江戸後期から明治初期の日本民具を中心とするコレクションは世界一を誇る。

6. 日本人は絶滅したか、

一種の記録とモースの視点—

水野 賀弥乃(哲学博士)

維新以来、一気に押し寄せる西洋文明の大波に消えゆくとする日本本来の姿を、モースは克明に記録した。世界に希有な民族であるとモースが驚嘆し、慈しんだ日本人の善とは、徳とは何か。モースが愛した日本人の煌きは、2000年を迎えた今も私たち一人一人が日常の中には育てている筈である。21世紀へ毅然と輝き続けてほしい、世界に貢献できる大きな光となってほしい、という願いをこめて寄稿した。

7. 團琢磨とMIT

藤崎 博也(前出)

米国の最初の工科大学は、MIT(1861年設立)である。福岡藩から派遣された本間英一郎は1871年(明治4年)にMITに入学、1874年に土木工学士として卒業し、鉄道建設に足跡を残している。岩倉使節団(1871年)に同行した留学生の中に、金子堅太郎、団琢磨がいた。金子はハーバード大学、団はMITに入学している。卒業・帰国後の団の経済界に於ける活動とMIT同窓生としての貢献を描いた。

「日本・ニューイングランド交流の記録」(内容紹介 つづき)

8. MITと日本人

-特にMITにおける活躍-

増淵 興一(MIT教授)

1976年7月から翌年4月迄、ウィリアム・クラーク博士の札幌農学校赴任にあたり、William Wheeler氏が同行した。彼は第2代教頭として79年12月まで勤めた。79年12月から81年12月まで、第3代の教頭はCecil H. Peabody(数学・土木教師)である。彼は帰国後、MITに戻り、86年に造船の講義を始め、93年に船舶工学科を創設した。東京帝国大学から船舶工学専攻の学生が卒業したのとはほぼ同時期である。

戦後、日本に進駐した軍人・軍属の中にMIT卒業生がおり、同窓生の間で交流が始まった。1978年、MITのIndustrial Liaison Program(ILP)の東京事務所が開設された。この事務所の運営には鮎川弥一氏(故人)の貢献が大きい。爾来、MITと日本の交流が盛んになり、日本人教授も迎えられている。

9. ポーツマス条約を支えたハード人脈と米国人のホスピタリティー

藤盛 紀明(前出)

米国人のホスピタリティーに焦点をあてて記述した。米国大統領としてのルーズベルトの判断は、米国の国益を第一とするものであった。日米関係について議論はあるが、クールな判断であったことを理解しなければならない。

また、小村と金子の行動スタイルに大きな違いがある。自らの哲学に固執するか、結果がよければプロセスに目をつむるか。個人の生きざまに関係する問題である。明治時代は多種多様な人材が活躍し、今日の基礎を築いた。

10. もう一人の特使・天心

-ボストンでの初年-

篠崎 史朗(元三菱商事(株)参与)

日露戦争を終結させたポーツマス条約と言うと、日本政府が特使として米国に送った金子堅太郎の活躍が引き合いに出されるが、その蔭で、当時ボストンに滞在し講演や著書出版などを通して、日本に対する理解と同情を米国民に訴えた天心・岡倉覚三の偉大な功績を忘れることは出来ない。戦争と重なる米国での最初の一年間の彼の活動を追って見た。

11. 人生ひた走り

-山田敬蔵の挫折、栄冠、そして献身
関 直彦(前出)

山田敬蔵さんは私たち日本ボストン会の誇る楽しい仲間。かってボストン・マラソンで最高記録を樹立し、気力を失った戦後直後に、水泳の古橋選手に引き続き日本に希望の火をともした人である。マラソンに賭ける心の葛藤と、その後の社会貢献を綴る。

12. 香道とボストン

-組香「メイワア香」ができるまで-

太田 清史(光華女子短期大学教授)

わが国の「香道」が誕生したのは、室町時代。香木の香りを鑑賞しながら、人格形成を目指している。

1985年、ボストンを訪問した老舗「松栄堂」畑正高氏を待ち受けていたのは、「狸楽苑」の和室の中に置かれていた時代物の精緻な二組の香道具であった。

ボストンにおける最初の香会は、その翌年から始められた。庄巻は98年、ボストン・スタジオが志野流香道第20世蜂谷宗玄家元宗匠をお迎えして開いた香会で、会員が作り上げた組香「メイワア香」の発表であった。

13. 失われた記憶を訪ねて

-日本の中のニューイングランド-

金子佳生・邦子(東北大学助教授・主婦)

日常生活を営むそのすぐ近くに、ひっそりと静かに歴史が眠っていた。印象に残った風景、スケッチ、詩情をご紹介します。感動を共有願えれば幸いです。

「歴史を飲もう会」の訪問先(所在地、最寄駅): 岩倉具視の墓所(海晏寺、JR京浜東北線大井町駅)、新渡戸稲造の墓所(多摩墓地、京王線多摩霊園駅)、天心記念公園(谷中、地下鉄千代田線千駄木駅)、大森貝塚・品川歴史館・大田区郷土博物館(JR京浜東北線大森駅)、「六角堂」(北茨城市五浦JR常磐線大津港駅)、生麦事件参考館(川崎JR鶴見線国道駅)。

14. 年表 藤盛 紀明(前出)

この年表は手元にあった明治時代の年表に、今回の執筆内容から拾った事項を追加して完成させた。

1791年にマ州ボストン籍のレディ・ワットソ号が和歌山県潮岬近くに寄港したところから始まっている。最後は小沢征爾氏のボストン交響楽団離任である。今後この年表を成熟させて行きたいと思っている。

感想・入手希望の連絡先: 関直彦

国吉康雄 (1889-1953)

20世紀前半のアメリカ美術を代表する画家

Bostonから車で5時間余り、ニューヨーク州コーネル大学の町、Ithacaに長く住んでいる友人からの便りは、広大なキャンパス内にある静かなたたずまいのJohnson 美術館を思い起こさせてくれる。

日系画家国吉康雄(1889-1953)の名前は知っていたが、彼の作品に最初に出会った美術館であった。

国吉康雄は1889(明治22)年、岡山に生まれ、1906(明治39)年に渡米する。最初は英語を学ぶ目的で、シアトルに上陸した。しかし、絵への夢が広がり、翌年Los Angeles美術学校に入学した。1910年ニューヨークに移り、1916年に多くのアメリカ人画家が学んだArt Student Leagueに入学した。この時、彼は絵は心の表現だと言うことを学んだ。

日本人でありながら、画家として完全にアメリカに属し、20世紀後半のアメリカ美術を代表する一人となった。1929年12月～1月、開館間もないMoma(N.Y.近代美術館)19人のアメリカ現存展に出品した。

社会不安の1930年代、ニューヨークと夏を過ごすニューイングランドのウッドストック両方のアトリエで女性像、風景、静物等と次々と作品を生み出した。ニューヨークの場末の女、サーカスの女性がよく描かれているが、彼女達は孤独で、物憂げである。

1933年、母校Art Student Leagueの教授となった国吉はアメリカ画壇で高い評価を受け、アメリカ社会に同化し、アメリカの画家として自覚して行く。

1940年、国吉はニューイングランドの荒寥とした廃墟、墓地をよく描くようになった。彼はスパイの嫌疑をかけられ、警官に尋問される事もあった。

1948年、ニューヨークWhitney 美術館では国吉康雄回顧展が開かれ、盛況であった。晩年の画は、鮮やかな色彩の中に暗さが秘められるようになってきた。

運命とは言え、大きな時代の流れの中を歩んで来た画家国吉康雄。多くのアメリカ人画家自身が生活し、生きているアメリカ社会の姿や、息吹を表現した様に異邦人である彼も又、同じ様に積極的に表現し続けたのであった。

2000年という大きな区切りの年、大自然に囲まれ建つJohnson 美術館、その中であって国吉の作品は多くの人の感動を呼ぶでしょう。

Feb. 25, 2000 美術愛好会 酒井典子

杉原顕彰碑設置の準備進む 於チェスナット・ヒル テンプル・エメス 構内

第2次大戦中に、リトアニア国カウナスに於いて、数千のユダヤ人に対して日本通過ビザを給付した元日本国外交官杉原千敏(ちゆね)氏の偉業を記念する杉原顕彰碑が建てられる。場所は生存者の一人、サムエル・マンスキ氏の所属するChestnut Hill のTemple Emeth 構内である。幅約2米の御影石には杉原氏の肖像にヘブライ語、英語と日本語による賛辞が刻まれた。

サドバリー在住の日本人造園技術者による日本庭園は建設中。除幕式は本年4月30日挙行予定である。

顕彰碑には日本語で、会員當間きよみさんの書で、下記の通り刻まれている。

杉原 千敏	
在	日本国領事
激動の1939-1941年の間に在勤。	
杉原氏により給付された二千余りのビザは六千のユダヤ人の命を救い、後に三世代、三万六千の命の源となる。	
獅子のような心を持つ者	
サムエル記Ⅱ 17:10	當間きよみ書

これらの経費を賄うための基金を募金中である。

寄付金送付先：

ゴルフ懇親会は6月8日(大安)に

日本ボストン会1999年第2回ゴルフ親睦会は、平成11年11月5日(金)に、千葉県松尾ゴルフクラブで開催されました。今回は名門コースで、しかもメンバー扱いでプレーできるとあって、5組、18人と通常より多くの会員が参加しました。結果は、第1回から毎回参加されてきた、當間きよみさんが念願の初優勝を達成しました。

次回、2000年第1回のゴルフ親睦会は、平成12年6月8日(木)におこないます。場所、時間はじめ現地までの地図等は参加申込者に直接お送りします。皆さん奮ってご参加下さい。申込締切りは5月8日です。

申込先： 近藤宣之

E-mail: .

米人教師ホームステイ(12月4日~5日)

ホームステイ経験録

子供たちがホスト役

西川文夫・絹子

御子神慶子

マイケルさん(Mr. Michael Smith Simon, Medford)は小学校の校長職に応募して、その職に就いたという話で、日米の違いを知りました。米国人にしては、お世辞の少ない清々しい人柄でした。わが家に着いてから早速近所の散歩に連れて行きました。

彼は鎮守の森でお祈りし、古寺では墓に興味を持ち、商店街にある漢方薬局を写真に収めて帰ってきた時は暗がりでした。

米国人の好みに関するわが家の経験則から、夕食は「ピフテキ、春巻き、サラダ」、朝食はアメリカンでした。小生は日本食で、彼は納豆、梅干し、羊羹をサンプル程度に試食しました。

わが家自慢の和式風呂があるのですが、「風邪を引くといけないから」と言ったら、翌朝シャワーを取りました。

七福神と十二支のウサギと竜の土鈴をあげたら説明を求められたので、インターネットで検索したところ、英文の図解が出てきました。彼はそれらのアドレスをE-mailでボストンへ転送しました。便利な世の中になったなと感心しました。

ダナ(Mrs. Donna B. Bruno, Medford)をわが家にお迎えしたのは昨年12月、何と塩入り紅茶を飲ませてしまったというマンガのような失敗で始まりました。ボストンからのお客様、ダナをお迎えするにあたって、『気取らず、無理せず、ありのまま』を心がけました。

紅茶の件で気取るに気取れず、かえって緊張がとれました。狭いマンションにお客様部屋などであろうはずもなく、娘の部屋を開放しました。(これも日本の真の住宅事情です。)料理も美しい和食は他におまかせすることにして(実は苦手!)、日頃食べているものをお出ししました。

娘は、自分の通っている小学校に連れて行ったり、英語の本を読んだり大張り切り。息子は『日本の小学生の本当の姿を見せなきゃ』と、これ幸いにTVゲームをして見せました。しかし、日本の小学校に関する質問にもちゃんと答えていたことも申し添えておきましょう。

懐かしいボストンからの素敵なお客様。私たち家族に貴重な体験をさせて下さった方々に感謝のペンを置きます。

生活体験の違いを実感

岡崎京子

12月4日の夕方、大きな重そうなケースを抱えた、ブルークラインの小学校教師(Ms. Marie Leman)をお迎えしました。途中、わが家からさほど遠くない豪徳寺に立ち寄りしました。世田谷百景にもなっている古寺はまだ紅葉や銀杏が紅葉していて苔の緑と相まって素晴らしい景色で、彼女も美しさに見とれていました。帰り際、かの有名な招き猫の由来を説明し、お土産に買うように勧めました。

夕食前に、上階に住んでいる兄嫁がお茶に招いてくれ、着物姿でお手前をする姿に何回もカメラのシャッターを切っていました。

夕食は洋風、和風取り混ぜて食卓に並べましたが、ほうれん草の胡麻和えが特に気に入っていました。

日本でのスケジュールがとても忙しく、時差ぼけもあり、とても疲れておられる様子なので、日本式の風呂をゆっくり入って戴きました。しかし、彼女はやはりアメリカ人でした。しっかり風呂栓を抜いていました。

今回彼女を受入れるにあたり、ゆっくり休んで戴くことを第一に考えました。たった、17時間の短い滞在でしたが、双方、暖かい気持ちの交流があったことが何よりでした。

後日、写真と一緒に届いた礼状に、アットホームなもてなしがとても嬉しかったと書き添えてありました。

日本ボストン会1999年度総会

日時 1999年11月12日(金)午後6時半
場所 NEC三田ハウス 芝クラブ
議事:代表幹事挨拶 乾杯、活動報告、会計報告。
出席者: 32人

ゲスト紹介 小林淳一氏(江戸東京博物館学芸員)

Mr. Jean Jacques Slotine, (MITポット研究者)

新会員紹介:中垣正史氏(北海道MA協会)、尾上篤生氏

第7回総会は土居副代表幹事の挨拶にて開会した。

高木代表幹事より名古屋ボストン美術館訪問とか、出版活動等この一年間の活動状況の報告があり、会員の積極的な参加を要請された。懇親会は、次期代表幹事をお引受け戴く茂木賢三郎氏に乾杯の発声をお願いし歓談の場に移った。

懇親会には、江戸東京博物館において開催中のピーボディ・エセックス博物館の収蔵品を中心に展示された「日米交流のあけぼの-黒船きたる-」展のお世話をされた小林淳一学芸員をお招きし、日米交流が200年まえの1799年、オランダ商館に用船されたマサチューセッツ州セーラム籍フランクリン号の長崎寄港から始まっているお話を伺った。

フランクリン号が持ちかえった日本の「珍品奇物」は、1799年セーラムに創設された東インド海洋協会に寄贈され、その収蔵品を引き継いでいるピーボディ・エセックス博物館に記録が残されている。今回の展示品に、1801年セーラム籍マーガレット号が持ちかえった品物も入っていることも紹介された。

「日本・ニューイングランド交流の記録」の制作・出版については、編集委員から報告が行われた。

中垣氏からは明年の北海道・マサチューセッツ州姉妹提携十周年記念の交流行事予定が紹介された。現代美術交流展(2000年9月オスト、2001年札幌)、記念訪問団交流(2000年9月オスト訪問、2001年2月来道)。

第7年度決算については棚橋氏から報告された。

各WGからの活動報告。最後はボストンから帰国中の増淵先生より、29年前より19年前までボストン日本人会会長を引受け、当時25人の生徒で発足した現地日本語学校は現在600人に増え、来年25周年を迎えるとの事。寄付の願いがあるかと思うが、その折りには協力方要請があり、閉会した。

幹事会報告

1999年12月6日(月)出席者14人

*新会員(前回9月幹事会以降)3家族。

金井公克さん、尾上篤生さん、中垣正史さん。

*会計報告

総会32人出席。収入約17万円、経費約13万円、前年度会計報告(総会報告分)

*歴史・ハイキングの会(10月23日土曜日)

桜木町駅前/観覧車/赤い倉庫/横浜開港資料館/ソウ博物館/山下公園/港の見える公園/外国人墓地/大珍楼 9名参加。(別項参照)

*ゴルフの会(11月5日金曜日)(別項参照)

於松尾ゴルフクラブ 18人参加。

當間きよみさん優勝。

*歴史出版計画報告

総会の時に配付。売上他146冊。残部46冊。関係団体配付報告(一部は日本ボストン会にて購入し、寄贈配付する。)

*関係団体報告

北海道MA協会-中垣事務局長が総会に出席頂く。名古屋ボストン美術館-美術館は今も大盛況。京都ボストン会-高木代表幹事に一任

*会報発行

3月末発行(原稿締切り2月末)。

トップページは出版報告とする予定。

*「日米交流あけぼの展」見学ツアー(19人参加)

11月27日(土)午後(小林学芸員のご厚意でご案内を頂く)。

2000年秋、エセックス・ピーボディ博物館にて

「日米交流あけぼの展」が開催される。

*総会・懇親会の反省

新会員の募集。

*米人教師-ムスター報告(12/4~5)(別項参照)

西川さん、岡崎さん、御子神さんをお願いした。

*ボストンガイドブック

新着48冊。在庫2冊。

2000年2月25日(金)出席者16人

*新会員(前回幹事会以降)5家族。

伊藤道生さん、黒沢敏夫さん、北原真木夫さん、新田謙治郎さん、吉田博さん。

*ボストンガイドブック

追加新着48冊。在庫36冊。

*次回幹事会 2000年5月15日(月)午後6時半。